

児を亡くして九死に一生の難行を経て柳川の実家で夫婦抱きあって泣く。夫婦再会できたことは、わが家の信仰心やどる慈悲あればこそと、八十歳をむかえた大瀧翁の感激の弁である。

(出引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助

北溟の空

佐賀県 清水 照子

一か月の青春

兄が結婚したので、私は家のことからやっと解放された。母は私が十二歳の時亡くなった。父には後妻が来て子供も出来、連れ子もいる。家の中が面白いかないので父は二世帯にした。我々兄弟の面倒をみてきた。妹や弟の母親代わりをつとめた。兄は私にお前は今日から好きなことをやってくれと言った。

しばらくけいこ事をしていたが、頼んでいた職が決

まり勤めに出た。住友生命でまだ支店でなく支所とあった。本社から月給三十円也の辞令が来た。

私は今二十歳、二十三歳まで頑張ろう。そのうち私の白馬の王子さまが現れる、それまで私の青春だと胸ふくらませて出勤した。

会社に勤務して間もない日に、佐賀高女の久久保先生より電話で、帰りに学校に寄ってくれとのこと、先生は私の縁談のこととお話したいとのこと、どこまでも恩師の親切さに心をうたれた。度々の電話のあと、濠端の大桶の下で待っていた。先生は来るなり、今日は本人が見えているから会ってくれと言われる。先生ひどい、こんな素顔なのにやはり女心である。いやそのままでいいよといって、さっさと行かれた。私は髪だけ五本の指で撫でつけて、桶の下から歩き出した。運動場の向こうに、背広姿の人が立っている、それは彼だとすぐ分かった。歩きながら、背は高い方だ、体格も良さそうだ。近くになって一礼して宿直室へ入る。久久保先生、角先生が話を向けられるので話したが、ご本人はチラッと見上げただけで、一言も話はな

かった。それからは毎日のように攻められる。あなたを是非とおっしゃっていると。なぜ直接本人より聞けないのかと思った。人間的にしっかりしておられるから、あなたへ行っても心配はない、男は心だと、心を強調されるただ主人のお守りだけでいいではないかと、仲人口調である。

本式のお見合いとなる。初めて近くで見ると彼は、神社前に立っている。奉納の石の狛犬のような鼻がでんとあぐらをかいていた。これがご縁かと思われた。

会社では短い期間であったが、楽しく勤務させていただいたので感謝と、申し訳ない気持ちでしたが、会社へお別れを言わねばならぬ、三年の約束が一月ですみませんと言った。所長は半分目でうなずいた。私の一か月の青春は終わりをつけた。

嵐の結婚

私の白馬の王子さまは、あわただしく大陸より現れ嵐のように、私を連れて北の国へと飛んでいくことになった。

昭和十五年九月十一日、と式の日取りが決まる。あ

わただしく一日が過ぎていく。戦時下の統制で無い綿を兄嫁の裁量で、干拓の綿が手に入り、ふとん二流れをこしらえる、伯母が鏡台と仕立台を祝いにくれた。

母は私の嫁入りの時を夢みて、日本髪が映えるようにと、私の髪を大事に手入れしていた。パーマもはやり、カツラが多くなっていた。どうしようと迷ったが、一目見たかったであらう母のために、自分の髪で高島田を結った。

九月一日、十日を、二百十日、二百二十日といって、台風の警戒をした。前夜はむし暑い夜で料亭での宴会はじつと暑さを耐えて座っていた。夜も重い高島田を外す訳もならず、暑さで眠れなかった。翌朝は静かだったが、式場に着くころは風も強く吹いてきた。一人前の膳がいくら、お酒がいくらと決まった統制下の披露宴も終わったが、まだ風は強い、温泉一泊も取りやめ、用心して長兄が用意してくれていた市内の旅館となる。

台風一過、晴れ渡った中を、仲人さんへの御礼や墓参りなど済まして、式から三日目の朝、いよいよ出発

のため下関へ向かった。ところが今度の台風はまだうろろろしていて、海は大荒れて連絡船は欠航していた。門司で一泊する、やっと台風から逃れて、釜山へ着いた。一路北進又北進、満鉄の列車は夜の吉林のホームへすべり込んだ。四々五人の友人が今日か今日かと待っていたそうで、駅前にも友人がいた。なにやら話していたが、我が家である協和荘のある文廟町へ、人車ヤシキに分乗し文廟町と聞いた私の車が一番に、サーッと走り出す。

私は後続が来ているか、風を切って走っている車夫は行先がちゃんと分かっているのか、後を見るが暗くてよく分からない、満月が澄んだ空を車に合わせて走っている。気付くと中秋節を祝って、家々の前で胡弓を奏でている。祝いの胡弓ということは後で知ったのだが。

この空の月だけが日本からついて来てくれていると、何とも言えない不安な気持ちで、お月さまお願いと思うっていると、ピタリと車は止まった。我が家の側だった。

松花江

河南街という中華街に、主人はそれまで親友と下宿していた。隣には小母さんとお兄さん娘さんと三人住んでいる、鹿兒島県出身だそうだ。娘さんは今二十三歳、背丈もあり仲々の美人である。主人たちはスミ子嬢と言っている。

主人の行李の中には、大島が仕立直しされて入っている。これは小母さんの手になるもの、手編みの靴下などなど、何でも小母さんの手になるものばかり。

小母さんの家を日曜毎に訪ねた。小母さんは息子夫婦でも帰って来たように、喜んで迎えてくれる、次の日曜日は川向こうへ行くことになっている、川向こうとは松花江を渡ると田園風でハイキングコースがある。スミ子嬢がそれを聞いて、「あら川向こうへ、私も行きたい」と言ったので、一緒に行くことになる。私は初めて見る大河である。悠久の流れは、流れているのだらうかと思うほどだ、向こう岸まで随分ありそう

だ。
石段を下りた舟着場には、一艘の細長い小舟が岸に

止まっている。その舟に乗ることになり、私は子供の
ようにひょいと飛び乗った。次に主人が乗り、スミ子
嬢が片足を乗り出すと舟がぐらっとした。

アレーと言うスミ子嬢の悲鳴に主人は手を取り舟の
中へ引き入れる、舟は岸を離れ、船頭は櫓を漕ぎ、進
んでいると流れも早くなる、段々中央近くになって舟
は揺れてきた。

アアアア、とまたスミ子嬢の悲鳴、「この舟がも
しひっくり返ったら清水さん助けてくれる」と甲高い
声、私はだんだん不思議な気持ちになってきた。

独身男性が二人もいて、隣にこんなお年頃の娘さん
がいて、どうして結婚しなかったのだから、こんな人
がいるんだったら、私なんかわざわざ日本から来るこ
ともなかったのに。

夜になって私は「あなたたちいくら親友でもどうし
てどちらか結婚しなかったの」と聞く。「二人共にス
ミ子嬢が好きだった、我々は紳士的すぎたなあ」と反
省のような言葉が返ってきた。スミ子嬢は今度は、協
和荘の我が家へ遊びに行きたいといった。

協和会

結婚の時戴いた履歴書には、高等拓植専門学校卒と、
書いてあったが、それがどんな仕事であるか分かって
はいない。何も知らないで大陸へやって来て、満州帝
国が建国されて、今年昭和十五年がこの国では康德七
年ということ、主人が協和会に勤務していることなど
やっと分かってきた。

満州国は、漢民族、大和民族、朝鮮民族、蒙古民族、
白系ロシアなど五族が伝統と文化の違い、生活状況の
違った者で形成された国家だ、行政も通りにくい、そ
れで官に非らず民に非らずの組織が出来て、民族協和
の運動を展開して、王道楽土の建設を進めている。

この建国の理想に燃えて集まった人たちで、満州国
の諸民族の間において、粉骨碎身、民族運動に精進し
ておられる協和会の人たちの姿を目のあたりにして、
私も勉強して理解できるようにならねばと思った。

鏡泊学園歌、山田耕作作曲、北溟の空風くらく、星
影淡き鏡泊の、湖畔に來たり、朝霧を、破りて崇き、
高邁の、東亜の光かかげ立つ、日東の健男子健男子わ

れら、

人一倍音痴の彼が、まあ何とかこの歌だけは聞ける、アジア大陸に民族協和の理想郷を建設しようと、昭和八年創立された、満州鏡泊学園建設に、若き血潮を燃やして全国から集まった。

入試は、東京、仙台、岡山、福岡であった。合格者はそれより、国土館にて指導訓練を受ける、山紫水明の鏡泊湖畔に定まった学園へ、さあ渡溝。

それぞれ分かれて研究実習する、その課程とは、実践倫理、東洋哲学、語学、国法、経済、地理、歴史、衛生、農業、林業、鉱業、土木、交通、通信、防衛、武道、獣医と分かれ研究実習することになり、彼は通信の部となる。

彼は堀田君、富永君等と伝書鳩の研究訓練に没頭する。三人は終生無二の親友となる。

学園の柱である山田総務以下十三人が、自家用トラックに、物資を満載しての帰途、大廟嶺山脈中待ち受けていた匪賊は落とし穴を設けて墜落させ、小銃を乱射して一行十三人を血祭りに上げた。

この殉難により、彼等の卒業を一期とし学園は解散する、こんな悲しい事件を乗り越えて、学園の後を農業する者、政府機関に、満鉄にとそれぞれの職に進む、彼は協和会へ入った。

草原の彼方

バスは草原の地平線に向かって走り続けている。とうとうここまで来てしまった。大陸で初めての正月を、苦しいつわりの内に過ごし、奥地への転勤である。

内地からは帰ってお産するようになると言ってきた。途中新京の病院で看てもらい、私に今一番良い方法を相談した。「今は安定期だから、任地へ行かれても良い。予定が八月下旬だから、一か月以上早めに出て来て下さい。入院も用意致します。」

信頼のおける先生の話に、それが一番良い方法だと思ひ、お約束してきた。ふと車が止まった。狼がいたという。バスの乗客は窓に顔を寄せて外を窺っている。こんな大草原の奥に人の住んでいるところがあるのかと心細くなる。

あつ見えたツと一人が叫んだ。地平線の黒い一点は

みるみる姿を現わした。乾安（カンアン）城門だ。乾安県へ着いた。その翌日から蒙古風、夜昼ぶっ通しで吹きまくる。つわりぎみの私は家の中でも逃げ場がなくて参った。突き当たるぐらい近寄らないと相手が分からない。視界五十度というそうだ。

宿舎がまだ決まっていなかったので、藤沼副県長のお宅にお世話になっている。蒙古風は目張りした二重窓から吹きこみ、金粉のような砂がざらざらたまる部屋を一日中掃除した。

副県長は私の用意した朝食を済まして出勤となる。夜は宴会が多く時々一緒に食事する。そんな時「奥さん、ここには（県病院）元赤十字看護婦だった、大野さんとおっしゃる、頼りがいのある立派な方がおられます。」

奥さんは是非この乾安でお産をして下さい。今までここでお産をした人がいない。皆県外へ出たのお産だ。あなたがここで初めてで、これからの日系婦人のため前例となり励みとなる。」と力説される。

主人は協和会乾安県本部事務長としての赴任である。

電気は無くランプで、ラジオは持ち腐れである。水は水屋さんが毎日水がめに運んでくれる、新聞は三日遅れ、炊事、風呂、オンドルと皆コリーヤンがらで、私はコリーヤン炊きと、ランプのはや磨きなどで一日回される。

乾安県城より遠く離れた小さい村に、ペストが発生したというニュースで城内は、大変な騒ぎとなり、バスも運行中止で、城門は閉まる。

ペスト菌は鼠に付いているノミが媒体で伝染する、協和会も協力することになり、防疫の課長さんの望月三郎氏と現地同行する。その出立は防疫服に身を固め、足首を絞めて長靴を、手首を絞めて手袋し、目だけ開いたる帽子被り、一分の空きもあらばこそだ。

ペストの家は全部焼き払われる。ペストに罹った人は、股の付け根のリンパ腺が固まり、ガーターが出来る。このガーターを早く取り除けば一命は助かるが、少しでも遅れると全身に毒が回って助からない。

今日は望月さんが、その手術をなさるのだ。主人もその場へ同行して、あつ、と息をのむ。生死の境なの

で、股を広げてずらっと並んで待っている。

帰って来る主人を待ちかまえ、門前でその固いので、たちを脱がせて丸裸にする。先ず風呂へ直行、用意の下着を着て、やっと人心地もついた風だが、その夜は全然食欲なし、私は門前の物を皆熱湯を掛けての後始末に大わらわだ。

県の防疫の方々のおかげでベストも収まった。私は自分の身のことも忘れていた。バスも前郭旗の駅まで通い出したが、道路がゆるみ揺れが大きいからと危険をさけ、お産のための新京行きは出来なくなった。

副県長のおっしゃる通りになった。大野さんは、鹿兒島県出身で、いつも護身用に大きいシェパード犬を連れて歩いているので、土地の人にはタイイー（大野）先生と言って大変恐がられている。

我が家への往診にも犬を連れて、玄關脇に座る。何時間でもご主人様の帰りを待っている。済まないが西郷さんを思い出す。でも細かい神経と優しさがあり、副県長のお声掛かりもあって、安心して出産を待った。

「水ッ。」大野さんは、コップ一ぱいのつもりが、主

人はバケツ一ぱい下げてくる。大野さんは口にはおぼり、逆さにした赤ちゃんに、フツとかける。オギャーと泣き出した。

大陸での初めての冬。凍った吉林の道路で良く転んだ。そのせいか長旅もあった。赤ちゃんはヘソの緒を二回も巻いていた。乾安で生まれたので安を取って安子と命名された。昭和十六年八月二十四日、出生より早や三か月すくすくと育っていた。

十二月八日、主人は慌ただしく入って来るなり、「アメリカと戦争だッ」といった。ハワイの真珠湾を攻撃したという。この年も明けた。窓外の小雪を見ながら、もうすぐ春よと安子に話していたら、転勤だといつて来た。まだ氷も解けきらぬ早春の乾安を後にした。

一期一会

磐石（バンセキ）の駅は、奉天、吉林を結ぶ吉奉線の中ほどである。満鉄には警固隊があり、隊には宿舎がある。ここが我々の宿舎となる。

ここも畳の間とオンドルの間で、燃料は薪と石炭で

大分衆になった。協和会は青年団や婦人会を組織して、運動の母体とする。

満鉄警固隊の今村隊長夫人が、協和会の磐石婦人会の分会長をなさっていて、私の家におみえになり、副分長をお願いに来たと言われる。

私はびっくりして、私には小さい子供がいる、若くて何の経験も無いことなど言っていて断った。

今村夫人は落着き払って、代々、協和会の事務長の奥さんがすることに成っているとと言われる。主人に相談すると仕方ないだろう、というので引受けることになった。

吉奉線の駅から二十キロ近く奥地へ行ったところで、青少年の訓練が始まった。主人は田舎を回っており、駅で落ち合って行くつもりだったのが遅れてしまった。

このあたりは一昔前は匪賊が往行していたところで、土地の人たちは今もなお恐れ、人っ子一人通る人の無い山道を、真夜中ただ一人奥地へ歩き出した。

やっと訓練所に着いた。だが誰何がない。訓練生を叩き起こして、弛んでいると説教を始めたそうだ。

そんなことを帰って来た主人から聞いて、何か生きものにも出合ったらどうするか何という命知らずだろうとぞーとした。

赴任以来、協和会運動は苦労続きだった。ところが今度の新しい副県長は理解があり、協和会運動もやり易くなったと喜んでゐる。

青少年の方を担当している早川さんに転勤のうわさだった。ところが何と主人に転勤命令が来た。

協和会のうちでは、今清水さんに行かれては困る。

もう一年どうしてももらいたいと、省に嘆願書を出すと言って騒いでいる、とのこと主人も今あまり動きたくない様子だが、私は「惜しまれて発つうちが花よね」と言った。

副県長のお声掛かりのせいだろう。日鮮満の人たちで、磐石駅はあふれて、外まで一ぱいの見送りだった。

昭和二十年の五月、磐石の空はさわやかに晴れ渡っていた。一期一会といえますか、これだけの人たちと、二く三の周りの人を除いて、その後一人もお会いしたことがない。

神のみぞ知る、三か月後、八月十五日がやってきたのだ。

ああ吉林

磐石での記念の子は、男ならよかったが、良い名前が付け難く、協和会の協を取り協子と命名した。

磐石を出発して吉林へ向かう汽車の中で安子は元気がない。風邪かなと思っていたが、元の古巣の協和荘に着いた夜も、息苦しい様子だ。

翌日病院へ診せに行くと、何とジフテリアの宣告を受け、そのまま隔離病棟へ入院となった。ジフテリアは法定伝染病である。

扁桃腺の上に白い点々のまぐが出来る、これがジフテリア菌で、綿棒の先につけた、ルゴールのような薬で拭くだけの治療であるが、二週間でやっと退院出来た。

協子はお父さんとよく留守番をしてくれた。そんなわけで、主人は協和会吉林県本部事務長との事務引継ぎも出来ていない。それから何とも不思議なこと、周りの人は何ともないのに、主人だけ真性赤痢という法

定伝染病で又隔離病棟へ入院させられた。

ようよう退院出来て、気も急ぐ主人に、中井事務長は、まあまあ清水さん体造りをして下さい。私はしばらくいましようと言ってもらって、日は過ぎていく。

「ドカン」一瞬吉林の夏の夜は昼間のように、明るく照らされ、空に浮いている白い球をぼかんと見上げていた。ソ連参戦の初夜だった。八月九日、続いて十五日の終戦である。

協和会県本部の中庭で、燃え出した事務書類、整理品の炎は、段々大きくなり、火柱は天を焦すのではと思われた。それから三日三晩燃え続けた。

夜明け前より、バリバリ、ガチャンと騒がしい音が目覚める。何事かとカーテンの端からのぞいたら、あつ暴民だ、物品の略奪はもう何時間にも及ぶ。近所の住民も暴民と化し、女も子供も何やら持って出ていく。天井板、床板まで運んでいる。

協和荘の門前の道を隔てた向かい側のSさんの家だ。私たちはありがたく協和会の中で、と思っていたら、協和会の後に政府軍が来ることになり、協和荘も宿舍

になる。明けてもらいたいとのことだ。

交渉の結果隣の会社の社宅へと決まり、短い時間内に荷物をまとめ、夜中静かに塀を越えた。森さん一家と共同生活が始まる。

一家は子供二人の四大家族と森さんの妹さんと子供二人、ご主人はソ連の日本軍人狩りで連行されたまま、奥さんは今大きいお腹を抱えている。

この社宅もソ連兵に狙われる。たまの日曜日だ。五衛門風呂を焚いた。ころ合いに沸いてまず、お腹の大きい武藤夫人に入ってもらおう。家の中が煙った。台所のドアを開けて風通しをした。その時だ。ノッソリとソ連兵が入ってきた。

靴のまま、台所の板敷から座敷へ行く。台所の私は外へ出ようとしたら、もう一人の兵が銃を持って立っていた。

私は地下の隠れ場所へ逃げようとしていたら、風呂場より「よい加減ですよお先に」と呑気な声が出た。私は臨月腹の風呂場の奥さんのことなど忘れていた。

ソ連兵が入っているとと言うと、そのころはなれっこ

になっていて、「どこの家に入ったの」と言う、「この家よ」というと、夫人の声は高くなり、「アラー、私どうしましょう、着物」と叫んだ。

着物は廊下を隔てた部屋に脱いでいる。今ソ連兵がいる。見付かるのが恐いので、奥さんそのまま早く逃げましょう。といって裸の夫人を先に入れ、私も入って後をしめて床下へ。頭の上は押入れで、物を出しサゴソやっている。

私は一枚脱いでは裸の奥さんに着せまた着せる。でも急に冷えてきた身はクシャミが出る。頭の上の兵に聞こえたら大変と、背中をさする。でもどうにもならず、奥さんはカビ臭い床下の土の中に顔を突込んでおられた。

恐るべきソ連警察は、満州国内の日系人の責任者、副隊長、協和会事務長は特に、一年くらい前まで皆彼等のリストに載っている。協和会吉林県本部中井事務長と名指しで、ソ連へ連行された。気の毒でならなかった。

主人は磐石を既に離れていたので助かった。もしあ

のまま磐石にいたら、どうなっていたらろう。三か月後主人はソ連へ連行され、残った私は難民となって皆と逃避行に。子を持つ親の苦しみは、何度も聞いている。それを思うと背筋の凍る思いがした。

劉さんありがとう

吉林神社の中は、今ショートル（泥棒）市場となつて賑わっているとか、取られたりした自分の物がここへ来ると、堂々と売られているそうだ。

主人たち三人は見物に出かけた。ごった返しの中、劉さんの三人連れとばったり出合った。飛び上がるほどびっくりして、そのまま案内して家へやって来た。

親子安全でいるのを見て、やっとあんどして帰る。

翌日は子供のお菓子など抱えて、又やって来た。子供がおいしそうに食べている様子が喜んでにこにこ帰って行った。その後もかげになっていろいろ、世話をしてくれた。

世の中は変わり、八路軍の世になってきた。私たちもこの社宅を追い出されることになった時、劉が現れて何か出来る手助けはと言うが、頼むことではない。

劉が荷物を預かろうと言ってくれるが、

終戦の時、吉林でも日本人の多くは満人に荷物を預けた。でも皆取られたしまったと聞いている。私はよし劉を信じようと、最後に着るのだと用意していた、新しい下着類、コートなど入れた行李を出し、言われるように紐で結び、結び目のところに白紙を貼りつけた。彼は抱えて行った。

私たちは近くの製氷会社後に引越した。ある寢苦しい夜だった。大勢の人が広場に出ていると、真黒い空に火の手が上り、バチバチ音が聞こえそうな勢いで燃え出した。あっちは満人街よ、高見の見物だという声に、次々に上がる火の手に、花火気分で見ている。

次の朝早く、劉は赤い目をしたような顔でやって来た。昨夜の火事を見たかという、見た、見たという、劉の家の火事だったという、私たちの行李が燃えたことを、言いに来たのかと思った。するとあの行李は出しているから取りに来てくれと言う。

なんとという正直な人か、彼が仏さまの顔に見える。劉が馬車を持って迎えに来た。主人がお前行ってこい

という。不安だったが劉の車に乗る。火事場と反対の方向に走っている。街中で止まり、馬車の修理工場のようなところで、中は広い土間と、二間ほどのオンドルが隅にあり、子供が二人寝ている。隅に行李が置いてあった。

紐の結び目は白い紙が貼られたままである。こんな仕事もしているのか。戦後次々に軍票が出て金の値打ちが変わるので、吉林は材木の集散地である。これから先のことを思い、全財産を材木に掛けた。道理で昨夜は良く燃えていた。

行李を開けて調べてくれという。私は持って帰る気がしなかった。いらぬというのと、とんでもない。あなたたちは働けないからこれが財産だ。自分たちは又働けばよいという。

行李を開けるとその時のままである。中ほどに私の支那服が入っていた。これ太々(奥さん)にと下着類など出して、シンジョ(あげる)というのと、謝々と頭を下げてもらってくれた。後は又行李をしめ又預けることにした。それはもう上げるつもりだった。それか

ら二度とその行李は見なかった。

引揚げ

ああ、これが敗戦の姿なのだ。神社までの道の両側は幾重にもなつて、日本人を嘲笑い、罵声、高見の見物、がやがやの中を引揚者の列は、悄然と荷物を背負い無言で歩いていく。神社へ着くと私はへたへたと座り込んだ。

そのころ体の弱っている私は、皆と行動出来るかと案じていた。主人はこの移送団の小隊長というので、先頭を行っている。私は一人を負んぶし、一人手を引き、荷物を持って、これから又駅まで歩かねばならぬ、気が遠くなる思いだった。

神社の外回りも人、人、人である。その中に馬車に立って私たちを捜している劉を安子が見つけた。手を掲げると飛んできて荷物を乗せ、私たちを乗せ、主人の荷物を乗せて、駅まで送ってくれたので助かった。出発は明日ということだ。

翌朝晴れ、引揚列車へ乗車のため小隊ごと又行列で歩いていると、駅の向こうに紐を張ってある垣のどこ

ろに劉が一人立っていた。走り寄りたいたが手を振ってサヨナラをした。劉は手を振り立ったり、しゃがんだりしていたが、お互いの間は離れていく。涙の顔は放心したように、ついには手も足も投げ出している。これが劉の最後の姿で、私の臉の裏には今も焼きついている。

待っていたのは無蓋車で、機関車三台を連ねた一番車で、やれやれ良かったねと言ったのも束の間、機関車からはき出る煙は、黒いアラレのように降ってくる。

出発前夜劉は最後のお別れ会のつもりだろう。酒、魚を捧げ、子供たちにお菓子など持ってやって来た。遅くまで主人と呑み交していた。今から弁当の用意だといったら劉は日本のおむすびカイホワイラ（すぐ腐る）、油を交えて作る粉のピンは一週間で悪くなる。自分が作って来るから、おむすびは作るなどいって帰った。

あれから帰って、家族で一晩焼いたのではないか、一枚一枚重ねられて外側を包み、丸太のようになってくる。翌朝出発前肩に担いで持ってきてくれた。

劉の心つもりでは、一週間でコロ島とふんでの食糧だったのだろうが、二か月かかってしまった。途中荒野の真只中に貨車は止まり、機関車だけ走り去られたり、奉天の収容所では三週間も、その間良く雨が降り、おしめは主人と私の背に敷いて乾かした。

中井事務長は、ソ連へ拉致された。後に奥さんと二歳の女の子二人で帰っている。三重県の実家へ帰り着くまでは、主人は気が休まらない風で、いざ奉天を出発となると、どなたでも仕度で大変だが、私のことなど眼中になく、あつという間に主人はいなくなる。

引揚船の甲板で、主人は差し当たり百姓をやるうかと言った。教師をしている兄の田んぼがある。その田んぼも不在地主で、既に無いことなど知る由もなく、百姓を知らない私は、鶏でも飼ってと、遠い内地に心を飛ばして、のんきに語り合っていた。

【執筆者の横顔】

名門、佐賀高女を卒業した照子さんは、佐賀市の住友生命支店に採用された。当時支店の中に一輪の花が

咲いたようだ、とたたえられたほど美貌にめぐまれていた。

採用試験のとき、係りのものから、もし採用になったら何年ぐらい勤められるか。と。私は女子なので三年は勤めさせていただきたい。

つまり約束三年の間答あつて採用となつた。

支店勤務は春風たいとうのごとくすこぶる勤勉なので、みんなから信頼されていた。

ところが、一か月余りを経たばかりで佐賀高女の大久保先生から、すばらしい男性をみつけたから見合いだけでも頼むとの切実な恩師の誠意に応じないわけには行かず見合ひした。その結果、この男なら生涯を託せると決意し、結婚した。その男が満州国協和会副理事清水礼太氏であり、照子さんは夫婦のちぎりを結んで下関から釜山、一路北進して満州国吉林駅頭で異国に住む清水の肉親にまさる仁義深い友人、堀田、富永のご両人の外大勢の出迎えをうけて、照子さんの胸中は喜びと涙の感動であつた。

夫婦は「生死一如」であると達観している照子さん

は、礼太氏のゆくところすべてわが人生の種乗社会であるとし、磐石県事務長、次は乾安県事務長、更に永吉県事務長に転々と赴任した。磐石と乾安には電灯なくランプ、水道なく井戸水といったごとく、全く満州人と同じ社会の家庭生活の中にあつて不平不満、愚痴一つ言わずに、ただ夫、礼太氏の公務が立派に果たせるように、針のあとに糸のごとく水入も辞せず、満州生活七年、労苦とくに終戦から引揚げるまで幾度か死線を越えてこれたのは、満州の諸々の社会人と同じレベルの上で助け合つた生活のおかげである。吉林駅からコロ島にむけ出発する際、劉氏からの助けがなかったら、あのごつたがえしの地獄社会から乗車はできなかったのである。

運よく夫婦そろつて引揚げてこれたが、礼太氏が今度、宮田虎雄佐賀市長から市職員にむかえられ、衛生課長、社会教育課長、市民会館長、定年退職後も、市社会福祉協議会事務局長として長きにわたり市政発展に尽力することができたのも、夫唱婦隨の照子さんの徹底した夫への協力のたまものである。

(社)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助)

我が奮闘記

宮崎県 日高 亮 明

それは遠い昔の思い出となりましたが、その思い出をたどることが私の人生でせめてもの慰めでもあり、永遠の平和の礎として後世に戦争の悲惨さを伝える義務ありと信じ筆を執ります。

私が渡満したのは大正十五年七月で撫順中学校一年生に転入しました。そのころの撫順は大露天掘りを拡張するため、旧市街を新市街地に移転する世界でも類を見ない大偉業を実施中でした。すなわち駅、病院、学校、商店街、支那街、その他市街地に付随する警察、郵便局、神社仏閣、ホテル、各事業所などが新しく整然と区画された新市街（現在の撫順市）に移転しました。黒ダイヤの街、撫順が持つ特異性はあるが満鉄の

偉大な力と、満鉄の会社員上下一体となった強固な団結によってこそ初めて、この豊かな生活と美しい環境が造られたのである。

新市街は駅を扇の要として永安大街、中央大街、千金大街の主要道路に一条通りから十条通りまで、網の目に道路が交錯し市街の美観、道路と並木の素晴らしい調和、そして満鉄社宅は小高い丘の上にこれも環状的に建てられ、家庭にあつてはガス、暖房設備は完備し、零下三十度の極寒にも浴衣一枚でビールを飲み、いつでもコックをひねれば熱湯がほとばしり、風呂と洗濯も思いのまま、社宅の前後には畑を耕し草花を植えて四季の移り変わりを愛でられた生活、まさに別天地のような理想郷社会が築かれていました。

これすなわち精根尽くした日本人の努力と中国人の力強い忍耐と在住両国民の相互信頼に基づく合作のたまもの以外何物でもなかったことを理解し、今後は戦前に残された業績に中国の新風を吹き込み東洋に誇る大撫順市の発展を祈ると共に、いささかでも我々の努力が中国の新しい発展に寄与し得た喜びを終生の誇り